

THE AMERICAS TODAY



天理大学アメリカス学会ニューズレター

NO. 75

2016年11月

Special to the Newsletter

文学と言語学のあいだ

河野 彰

私は学部（上智大学外国語学部）でポルトガル語を専攻し、大学院（上智大学修士課程）で言語学を専攻した者で、1979年に大阪外国語大学に教員として採用されてから、ポルトガル語を専攻する学生たちに初級から上級のポルトガル語を教えることが主な仕事となった。もちろん語学実習だけでなく、ポルトガル語を対象とする言語学の講義や演習、卒論指導等も行った。そのような中で、初級を終えた学生たちの教材にポルトガル、ブラジルの文学作品を取り上げることも多かった。自分自身の経験から、原語で文学作品（小説、詩、戯曲など）を読まなければ、やはり真の意味での語学力はつかないのではないかと確信していたからであり、学生諸君にもその旨を説いてきた。

私がポルトガル語を学んだ1960年代後半の上智大学ポルトガル語学科では聖職者の native speaker が教員として多く在籍し、その意味では実用的な語学を学ぶには恵まれた環境ではあったが、ポルトガル語圏の文学を講じる教師は、残念ながら、いなかった。今から見ると、まさにまだまだ発展途中の段階であった。恩師の故佐野泰彦先生も原語で文学作品を読む重要性を認識されていて、我々が受講した授業では常に文学作品の講読を課されていたが、先生ご自身も文学研究を専門に学ばれておらず（旧制東京外語から東大法学部政治学科卒）、授業はただ作品を訳すだけであった。私自身がようやくポルトガル文学の授業を受けたのは院生時代の1974年になって留学先のコインブラ大学においてであった。

教員として大阪外国語大学に勤務し始めてからも、授業で学生にポルトガル語で書かれた小説を読ませたりしたもの、文学をどう論じてよいのかわからなかった。文学部に進学しなかったためもあり、また言語学を専攻していたので、自分の興味の赴くままに、色々と文学作品（ポルトガル語関係のみならずアメリカ文学なども）を読み漁ってはいたが、文学研究の先行研究などに十分目を通すこともなく、馬齢を重ねてしまった。比較的最近になってようやく廣野由美子『批評理論入門』（中公新書、2005）やデイヴィッド・ロッジ（柴田元幸・斎藤兆史訳）『小説の技巧』（白水社、1997）を読み、なんとなく小説の読み方がわかってきたような気がした。それでも、文学についての論文を執筆することはできなかった。

自分の専門の言語学では、院生時代はちょうどチョムスキーの生成文法が華々しく登場した時期であり、私も初期の生成文法を学んでいた。やがて教員となった1980年代はブラジルで Labov 流の社会言語学が盛んになり、私自身も熱心にそれらの研究論文を読んでいった。変異理論に基づくこ

これらの研究は、大規模なデータを扱う研究であり、私自身がまったく海外に出ることができなかった80年代において、研究内容に興味はあったものの自分自身が first-hand な研究を行うことは不可能だった。

暗中模索の状態が続くなか、1990年代になって UCLA で毎年開催されるポルトガル語関係の小さな学会に定期的に参加するようになり、出席を重ねるうちにアメリカの大学で活躍している多くの研究者と交流するようになった。その中のひとりに UC Berkeley の Milton M. Azevedo 教授（現在は名誉教授）がいた。我々が知り合った1990年代中ごろ、同教授は Literary Linguistics という分野を確立し、盛んに論文を発表していた。同教授の論文のタイトルをいくつか挙げてみる。“Shadows of a Literary Dialect: *For Whom the Bell Tolls* in Five Romance Languages,” “Linguistic Features in the Literary Representation of Vernacular Brazilian Portuguese,” “Hemingway in Two Accents: “*For Whom the Bell Tolls*” and “*A Farewell to Arms*” in European Portuguese and Brazilian Portuguese.” 寄贈されたこれらの論文を読み進めるうちに、私でもなにか文学と言語学をつなぐ研究ができるのではないかと考えるようになった。要するに大量のデータを扱うことや、現地でのフィールドワークは私の置かれた（当時の）状況からはむずかしかったので、何か文学作品を選び、そのテキストを言語学的観点から徹底的に読み込むことで見えてくることではないかと思うようになった。

1990年代後半に国立国語研究所から依頼された研究プロジェクトのために、その頃、増加しつつあった在日ブラジル人の用いるポルトガル語が、日本語から多くの語彙を借用している事実に注目して、借用語の研究を行った。やがて日本移民を扱ったブラジルの小説には多くの日本語からの借用語が登場し、ブラジルが舞台となるアメリカの小説にも英語の本文の中にポルトガル語からの借用語が登場している事実に意識的に(!)気づくようになり、それらを調査して論文にまとめてみた。扱った作品は、ブラジルのものでは、Laura Honda-Hasegawa, *Sonhos Bloqueados*（日系女性が主人公の自伝的小説）、Fernando Morais, *Corações Sujos*（終戦直後ブラジル日系社会で発生したいわゆる勝ち組、負け組み抗争を扱ったノンフィクション・ノベル）などであり、この中で日本語からの借用語、あるいは日本語をそのまま引用した箇所などが多く見られる。このような例は、古くはヘミングウェイの『誰がために鐘は鳴る』などがあり、作品の舞台がスペインということもあって、スペイン語から多くの語彙、表現が借用されている。このようにある言語で書かれた文学作品中に他の言語が登場した場合、作者は作品中の外国語・借用語をどのような手段で読者に伝えるのか、その方法などを検討してみた。たとえば日本語の小説では「ふりがな」、英語やポルトガル語の小説では「パラフレーズ」や文脈からその意味を読者に推測させる方法などがあることがわかった。もっとも、最近注目されている Junot Diaz の作品などは、まさにアメリカ国内での中南米からの移民たちのことばがそのまま再現されていて、英語の本文にスペイン語が何の説明もなく出現している。いわば読者に丸投げである。Diaz の邦訳ではアメリカ文学の専門家が翻訳しているが、スペイン語に堪能な者を共訳者に迎えたりしている。

このようなわけで、本来、言語学者を志していた私は、若い頃から抱いていた「文学(部)コンプレックス」のせいもあり、なんとか文学にも接点を持とうと以前から悪戦苦闘してきた。外国語学部に文学は不要だという意見も時折耳にするが、少なくともポルトガル語圏の文学は文学部では扱われていない。ポルトガル語圏の文化をよりよく理解するためには今後ポルトガル語で書かれているアフリカ文学をも視野に入れなければならない時代になってきているようだ。

(大阪大学名誉教授)

Scenery

文学の中のアメリカ生活誌 (66)

新井 正一郎

The Dutch (オランダ人) 17世紀前半のオランダは新世界の領土獲得の争いにおいて、ポルトガル、スペインを凌駕し、イギリスに追いつきかけていた。『ロビンソン・クルーソー』(1719)の著者ダニエル・デフォー(1659?~1731)は、その理由はビジネス(商業)を持っているためだと、こう書き記している。「オランダ人を中間商人、ヨーロッパの間屋、仲買人と解さなければならない。彼等は再度売りさばくために、購入し、出荷のため買い入れる。彼等の貿易の大部分は、全世界に供給するため世界のあらゆる地域から供給されている」。1609年9月12日、オランダの東インド会社に雇われていたイギリス人船乗りヘンリー・ハドソンは、帆船「半月号」に30人のイギリス人とオランダ人の乗組員を乗せて新世界に向かった。彼は求めていた伝説の東洋への近道こそ発見できなかったが、今日彼の名がついているハドソン川を友人ジョン・スミスから聞いた太平洋への水路と思い込み、北上し、現在のオールバニー付近で錨を下ろし、周囲を探検した。帰国したハドソンは早速東インド会社の経営陣への報告書のなかで、毛皮、作物に恵まれたこの地は「私のこれまでの上陸のなかで耕作に最高の地です」と書いた。会社はこの言葉に飛びつき、オランダ西インド会社という新大陸の取引を扱う新しい貿易会社を設立する。新会社は1613年オレンジ砦に、翌年にはハドソン川沿いのナッソー砦に小さな交易所を開いた。

1621年、オランダの5大都市の商業関係者たちがNieuw Nederlandt—New Netherland「新オランダ」(デラウェア川からコネティカット川までの広大な中部太平洋沿岸地帯)の領有権を宣言すると、5年後(1626年)、新会社の社長ピーター・ミヌエットは僅か60ギニー(約20ドル)でインディアンから買い取ったマンハッタン島の南端に移住地を築く目的で、オランダ人とワルーン人(フランス語を話すプロテスタント)からなる30家族を送り込んだ。これは後に故郷の最大の都市の名をとってニューアムステルダムと呼ばれ、「新オランダ」の首都になる植民地である。この後も会社はオランダ市民にこの植民地への移住を呼びかけたが、移住希望者は増えなかった。その結果、早くからニューアムステルダム植民地に入ったのは、スウェーデン、ノールウェー、デンマーク、ドイツなどからの移民や黒人奴隷で、1643年には約18種類の違った言語がこの地で話されていた。人種の混血も明らかで、その後のニューヨークの特徴となる国際色は17世紀前半にすでに現われていたわけである。その結果、長く会社の幹部は植民地に対し厳格な行政上の管理を行い、道路などの公共費用を制限していた。そうした時、植民を促す政策を考えついたという点で重要な人物が、オランダ西インド会社の株主でもあったキリエン・ヴァ・レンスラーである。毛皮取引という商いだけではニューアムステルダムを利益にあふれた植民地にはできないと考え、本国の封建的なpatroon「荘園的な土地所有者」に倣って、オランダから50人の移民を連れてきた者にはハドソン川流域の広大な土地だけでなく、狩猟、漁業、毛皮取引などの特権を与えるCharter of Freedom and Exemptions「自由と免税への特許状」を会社に発行させた。これを機にハドソン川沿岸にはバンレンセラー家、コートランド家のような貴族たちが多くの使用人を連れてやってき、そこに巨大な館を建てた。これらの貴族や富裕な商人は祝祭日が好きだったので、土地の生活に色彩を与えた。1630年にはニューアムステルダムの人口は300名を、1660年には2,400

名を数えるにいたった。商業だけでなく、農業も活発になり、ヨーロッパ文化風の快適さを持った自立社会が育っていくが、1664年にイギリスとの戦争に敗れた結果、ニューアムステルダムはイギリスのものとなり、「ニューヨーク」と呼ばれるようになる。しかしオランダ人に創始された街であることは、裕福な商人の家庭で使う言葉や狭い道路に立ち並ぶ住宅の屋根や切妻をみてもうかがえる。

ニューアムステルダムのオランダ人たちを描いた作家として、ワシントン・アーヴィング（1783～1859）という最初のアメリカの文人がいる。ニューヨークで裕福な金物商の末っ子として生まれたものの、父や兄弟たちが発展させた家業には興味がなく、実業を人の思いや「魂を殺す」仕事とみなしていた。彼は1804年から2年間ヨーロッパ各地を旅行するが、ヨーロッパ滞在中自分が求めているのは、イギリスの田園風景の「刈り込んだ植え込み、緑の草地」がもつ「静けさと安定」と安らぎにあると自覚するようになった。しかし、このようなロマン主義的な考えを携えて帰国すると、驚いたことにニューヨークは実利一点ばりの俗っぽい商いの町に変化していた。古いオランダ風を偲ばせる静かな風景や暮らしはもうなくなっていた。代って賑やかな立派な街路、ギリシャ復古調の新しい建造物といった富の蓄積がいたるところに見られるようになった。ところが、ニューヨークが劇的に相貌を変えていくにつれ、その一方で過去は切り捨てられている、と嘆きだけでなく、過去は思い出のつまっているものゆえに、目を向けるべきものと唱えるニューヨーク層が増えだした。こうして1804年にニューヨーク歴史協会といった文化的施設がつけられ、5年後の1809年にはアーヴィングがニッカー・ボーカーというオランダ人名のペンネームでユーモア諷刺作『ニューヨーク史—世界の源流からオランダ王朝の終焉まで』を著すと、たちまちベストセラーになった。アーヴィングによると、この作品の創作動機は、世俗的利益の追求からあこのころのニューヨーク、つまりオランダの領地であった頃の懐かしいのどかな日々を忘れてしまっている「ニューヨーク市民の在りようを改めたい」ことにあった。33篇の短編からなる代表作『スケッチブック』（1819～20）に収められたいくつかのアメリカについての物語、たとえばキャツキル山のふもとのぬくもりのある村を舞台にした「リップ・ヴァン・ウィンクル」も、現在のニューヨークというよりも風俗も人情もちがう昔のニューヨークに主題を求めている。主人公は木訥なオランダ移民の子孫リップ・ヴァン・ウィンクル。彼が山腹で丸20年間の眠りから覚め村に戻ってくると、アメリカは一攫千金熱につかれた国に変わっていて、かつての穏やかな村人たちも活気にあふれ、選挙、自由、議員という新語を得意げに口にしている人間になっているところなどは、前記の2年間のヨーロッパ旅行から帰ってきた時に作者が感じたあらあらしく変わったアメリカへの戸惑いそのままと言えるかもしれない。リップの思いは、そうした人間も社会の仕組みも全くちがう故郷を受け入れ、力強く生きていこうとすることでなかった。彼の胸に常にたぎっていたものは、そうでなく、消えてしまった古きニューヨークの朦朧画のような面影であった。換言すれば、作者はこの作品の中で商い取引から遠く離れた村、薄い煙が立ちのぼるオランダ風の家、村人らが集まる大きな木の陰、彼等の世間話、子供とのたこあげや石はじき—こうしたイメージを多用しながら、その時代のニューヨークの人々が日常的にもっていた質朴さや安らぎを懐かしむ気持ちを響かせている。時代遅れのものを描いたときおもむきがある『スケッチブック』はヨーロッパだけでなく、アメリカでもよく売れたため、1832年に帰国した時、彼は英雄のように扱われた。

（天理大学名誉教授・天理大学アメリカス学会元会長）

【アメリカス学会定例研究会・発表要旨】

基軸通貨とグローバルゼーション・

パラドックスの世界構造

明治維新とは何であったのか

(米国と日本の関係の視点から)

森田 成男

調査報道の堤未果によれば、米国上院財務委員会の通商小委員会委員長のトップ議員が、自身が監督する立場にある TPP 交渉に関する情報へアクセスすることができない奇妙な現実があった。交渉内容は USTR（米国通商代表部）が仕切っており、600 社の企業代表だけが、閲覧や修正を許可されているからだ。国民の代表である議員が交渉内容を自由に見ることもできず、それに関し USTR と協議する場も与えられていない。通商交渉委員会のスタッフディレクターは、この状況をこう語る。「この異常な状況が、今の米国をよく表していると言えるでしょう。TPP 交渉一つとっても、日本を含む各国政府が交渉を進めている相手が、かつてのような国家としてのアメリカだと思わない方がいい。今政府の後ろにいるのは、もっとずっと大きな力をもった、顔の見えない集団なのです」と。

1. 「米国社会の変容」の現況

堤未果は、米国立法交流評議会（ALEC）他、グローバル企業による州議会の法律制定プロセスの利益誘導的傾向の増大の問題にふれている。例えば、ALEC は NPO（特定非営利団体）として登録されているが、「フォーチュン 500」の上位 100 企業の半数がメンバーで、彼らに都合がよい様々な政策草案を日々練っている。そして、通常のロビイストや政治団体より、はるかに強大な力をもつ。今では巨大多国籍企業と政府間の回転ドアはワシントンでは常識と言

われている。

2010 年 1 月、米国において、ついに企業の政治献金が無制限になった。これまでの連邦法は外国企業や外国籍を持つ者の政治献金を禁止していたが、匿名寄付を可能にした「市民連合判決」のおかげで、諸外国の業界ロビイストが、企業名を出さずに好きなだけ献金できるようになった。寄付者は匿名でいられるために、まったく不透明で、結果的に企業が選挙運動に参加することになる。

2. 大手会計事務所とウォール街のインサイダー・コネクション

2001 年 12 月、米国の総合エネルギー企業のエンロンが倒産した。エンロンの足は各タックスヘイブンに分散し 3000 本に達していた。呆れたことに、倒産の 4 日前、S & P によるエンロンの格付けは BBB（投資適格）であった。エンロン破綻の翌月には、全米第 3 位のディスカウント店 K マートが破綻した。エンロンの監査はアーサー・アンダーセン、K マートの監査はプライス・ウォーターハウスで、いずれも監査事務所に重大なミスと不正があった。残りの巨大監査事務所のデロイト・トウーシェー・トーマツ、アーンスト・ヤング、KPMG（旧名ピート・マーウィック）なども様々な不祥事を起こしていた。

米国の巨大監査事務所は、不思議なメカニズムをもつ。彼らは企業の監査をするだけでなく、ウォール街を監視する SEC も兼ねている。ウォール街と財務省幹部職と上下院銀行委員会の三者の間を、政府任用によって関係者が往復する。そこには、将来の採用を期待する者同士が持つ強い共感があり、金融業界に対する政府の圧力は限定的になりがちだ。クリントン政権の元労働長官のロバート・ライシュは、それら

を「富が集中するように仕組まれたゲーム」と表現している。

3. 穀物メジャーのネットワーク構造

トウモロコシ農家の支援が米国の国益に資するという穀物メジャーの強い主張のもとに、あり得ないほど大量のトウモロコシ生産助長の、米国の補助金制度が設けられた。米国で生産されるトウモロコシの1割近くがブドウ糖果糖液糖の原料で、この生産は、ADM、カーギル、テート・アンド・ライル社の子会社のステイレー社の三社によって、ほぼ独占されている。コココーラ社とペプシコの二社は、1990年代初めに、このブドウ糖果糖液糖の製造業界が価格談合していたと、アーチャー・ダニエルズ・ミッドランド（ADM）社、カーギル社などに集団訴訟を起こし、和解金を得ることで決着した。

英国のリヨンズ社が前世紀の「食品帝国」の巨人ならアルトリアは現代の巨人である。アルトリアは、米通商代表部の農業技術諮問委員会のメンバーを務めるなど、米政権の中核とも近い関係にある。同社は1998年から2004年の間に、米農務省から鉄道退職者委員会にいたる、20以上もの連邦政府機関に働きかけるために50社以上のロビイング団体を雇っていた。米国は「世界をコントロールするための、一番安い武器」として補助金漬けの食料輸出を位置づけ、官民一体となり外国市場のシェアを広げる。米、小麦、トウモロコシという穀物3品目について、米国は約1兆円もの輸出補助金を投じている。

4. 世界の「プランテーション構造」について

17世紀以降の植民地支配の時代、英国はインドで綿を、マレーでゴムをつくり、オランダはインドネシアで胡椒を栽培するなど、農業プ

ランテーションを展開していた。世界の基本的な構造は、17世紀以降の農業プランテーションが、資本を持つ国際金融による工業プランテーションに形を変えただけで、基本的に搾取構造という本質は、21世紀の今日、何も変わっていない。1990年代からは、日本のビジネス能力を米国（ウォール街）が次第に牽制・束縛し始めた。ジョバンニ・アリギによれば、終戦前後の米国による「寛大な」貿易の体制が変質しはじめたのである。無条件での保護費用の支払いを強請するだけでなく、大規模な円の平価切下げや輸出自主規制など、貿易での譲歩をも日本に強いた。バブルが急降下で崩壊の中、BIS規制を受け入れたため、日本の金融機関の自己資本比率が急激に低下し、これが貸し剥がし貸し渋りを促進した。多くの保険会社や証券会社が破綻に追い込まれ、日本の中核的な資産が、海外に底値で食われてしまった。

「グローバリズムの本質」を簡単に説明すれば、世界を股にかけた国際金融資本が「儲かる国」を目指して投資を雪崩れ込ませ、相手国から配当金、金利収入などの所得を吸い上げるための仕組みである。1991年のソ連崩壊以降、世界はグローバリズム（タックスヘイブンを含む）の名のもとで、1%の側が有利な方向に、ほとんどの分野で変容されてきた。

5. ダニ・ロドリック『グローバリゼーション・パラドクス』の視角

金融投資家、民間の私的領域にある「格付け会社」、IFRS（国際財務報告規準）、IMFやWTOなどの国際機関によって、国民国家及び公共的な国民の権利が浸食され続けている。とくに、最近の30年間で、税収を奪われ、弱体化した国民国家の統治が目立ってきた。そもそも国民の安全保障の強化は、国家主権を執行す

る、その国の政府にしかできない。グローバリゼーションのさらなる拡大、国家主権、民主主義の三つのうち、二つしかとることしかできないとダニ・ロドリックは主張する。彼が期待をよせるのは、グローバリゼーションを「薄く」とどめることで、世界経済に安定を取り戻そうという道である。

バリー・アイケングリーンは、『グローバル・インバランス』（2010）と、『とてつもない特権—君臨する基軸通貨ドルの不安』（2012）において、基軸通貨ドルの戦後70年の潮流を俯瞰している。グローバル企業が利益を恒常的に吸い上げる手法として、ワシントン・コンセンサスや、新自由主義・市場原理主義が世界中に過度に宣伝されてきた。金融や貿易を通じて、世界の国々が簡単に逃げられないように、国際制度の網の目や、財とカネの流れが意図的に仕組まれてきた側面を分析する。そのグローバル・インバランスの根底には、ドルでしか石油が買えない「ペトロダラー体制」という国際通貨体制のアンカー（構造的な中心・重し）のリアルな現実がある。

6. 米国の FATCA（ファトカ、外国口座税務規律順守法）とタックスヘイブン

2008年のリーマン・ショックによる世界的な金融崩壊を受けて、2010年に米国で制定された外国口座税務規律順守法（FATCA）がついに、2014年7月1日から施行された。これは米国の富裕層や大企業が国際的に脱税するのを防止する仕組みで、「Foreign Account Tax Compliance Act」の略称である。顧客の口座の残高が5万ドルを超える場合には、その口座の最終受益者が米国の市民か居住者か法人であるかを常に確認し、米国の内国歳入庁に口座の詳細を報告する義務を負うことになった。また、

口座の最終所有者が米国の市民、居住者、法人でない場合でも、その口座の資産が米国の有価証券やそれに関わる金融商品であった場合には、同じ義務を負うことになる。国際 NGO オックスファムによると、多国籍企業の税逃れで、毎年1110億ドル（約12兆円）が米国政府の歳入から失われ続けている。金融秩序の安定化をはかりながら、『ドルの一極支配体制』の強化を狙ったものでもある。

7. 「日本文化の基底にあるもの」、明治維新とは何であったのか

渡辺京二『逝きし世の面影』（1998）は、西洋人の眼に見えた幕末前後の、日本社会の牧歌的で倫理的で凛々しい民衆の姿を、当時の膨大な来日外国人の残した日記や記録類を総合しながら、私たちの文化的 DNA を教えている。経済活動は文明・文化の型の影響下にある。人間は裸形の自然の中で生きるものではない。「人間は自然＝世界をかならずひとつの意味あるコスモスとして、人間化して生きるのである。（中略）問題は、その再構成された世界が、人間に生きるに値する一生を保障するかどうかにあるだろう」。調和のとれた世界中のコミュニティを壊し続けてきたのは何であったのか。現代文明の危機をもたらした、欧米流唯我独尊思考を相対化する、「人類の原初的な互酬共同体」（陽気でおおらかな寛容性）の、豊かな文化的土壌の再認識に道を拓くものではなかるうか。市場原理主義・新自由主義という「グローバリズム」の席卷で、人類は息も絶え絶えの現状である。私たちの国はこの先、一体どこへ行こうとするのか。

（天理大学非常勤講師）

お知らせ

◇天理大学アメリカス学会は、きたる 11 月 26 日（土）12：30 から天理大学研究棟 3 階第 1 会議室において、「第 21 回年次大会」を開催します。大会当日、学会誌『アメリカス研究』第 21 号を会員のみなさまに配布させていただく予定であります。お楽しみにご来場ください。

なお、大会プログラムは次のとおりです。

<総会> 12：30～

<研究発表 1> 13：15～14：15

山本晃司氏（天理大学国際学部専任講師）

「英・米に見られる母音変化—TRAP 母音を中心に—」

<研究発表 2> 14：25～15：25

吉野達也氏（大阪経済大学非常勤講師）

「メキシコにおける 1990 年代の選挙競争」

<記念講演> 15：40～17：00

青木繁氏（NHK コスモメディア・アメリカ元取締役副社長 テレビジャパン担当）

「日系アメリカ人三世タク・フルモトの語る日系家族の軌跡—戦時強制収容、被爆地ヒロシマ、ベトナム戦争従軍—」

◇記念講演をして頂く青木繁氏は 1950 年生まれで、日本放送協会（NHK）で主として番組制作のお仕事をなさいました。2007 年から NHK エンタープライズで、主として NHK 番組の海外展開のお仕事をされ、この 7 月に退職されました。視聴覚メディア、バーチャルリアリティー技術の教育利用、インターネットと英語教育などに関する著書・論文・研究報告・講演が多数ありで、制作した番組は 25 に及びます。

記念講演では、ニューヨーク・マンハッタンで不動産会社を経営する日系アメリカ人三世タク・フルモトさんを取りあげます。日系アメリカ人史に関しては、戦時強制収容が最もよく研究されていますが、収容所から解放された後の

日系人、特に焼け跡の日本に向かった日系アメリカ人となると、研究はやっと始まったばかりの観があります。ご講演では青木氏が長時間かけてインタビューした記録に基づき、日系人家族の軌跡を紹介されます。

◇講演に先立ち、ふたつの研究発表があります。お二人とも天理大学出身の新進気鋭の研究者であります。乞うご期待。

編集後記

◇巻頭言をいただいた河野彰氏（大阪大学名誉教授）は会員のみなさまもご記憶のことと存じますが、2014 年の年次大会に記念講演をしていただきました。ご講演では、人の移動による「借用語」についてお話しいただきました。ニューズレターでは、外国語教育とて文学作品を活用することは有意義であることは確かであるが、じっさいにはどのように扱っていくべきかという課題に関して、ご自身の経験をもとに論じてくださっています。

☆新入会員：

山本 晃司（2016 年 7 月入会）

尾上 貴行（2016 年 7 月入会）

◇当学会の年会費は一般会員は、5,000 円です（入会金はありません）。なお、一般会員とは別に、賛助会員を募集致しております。賛助会員の会費は年 1 口 3 万円です。

天理大学アメリカス学会に関するお問い合わせは下記へお申し出ください。

天理大学アメリカス学会ニューズレター

(No. 75：2016 年 11 月 9 日発行)

発行者：木下民生

〒632-8510 天理市杣之内町 1050

天理大学アメリカス学会

電話：0743-63-9076

Fax：0743-62-1965

e-mail: tuaas@sta.tenri-u.ac.jp

<http://www.tenri-u.ac.jp/tngai/americas/>